

10 『撒氏産論』の原著者

ゴットリープ・サロモンについて

石原 力

嘉永五年（一八五二）四月二十五日（太陽暦の六月十二日）、現埼玉県飯能市坂元二二九八番地の本橋家で、我が国で初めての帝王切開術が伊古田純道と岡部均平とによって行われ、成功したことは、本学会による昭和六十二年の記念碑建立以来、よく知られるところとなった。手術に際し、術者伊古田が抛り所としたのは、オランダ・ライデン大学サロモン原著の〈Handleiding tot de Verloskunde〉の第2版を矢田部卿雲が翻訳した『撒氏産論』であることが明らかにされている。私は一九九三年九月十一日、日蘭シンポジウムが開かれたライデン大学医学部教室で、我が国最初の帝王切開の背後にライデン大学産科の影響があったことについて発表したが、今回はライデンで得られた調査結果も交えて、サロモンの伝記に

ついて述べたい。

ゴットリープ・S・サロモン (Gottlieb S. Salomon) は、一七七四年四月二十六日ダンツィッヒ（現ポーランドのグダニスク）でユダヤ人の両親から、商人の子として生まれた。十四歳のときケーニヒスベルクのラテン語学校へ入学、後その大学で医学を学んだ。九七年八月三日「骨軟化症、しかも比較的まれな症例について」という学位請求論文で（内科）医学博士になった。アメリカは彼にとって夢の国であった。そこで一念発起、古いプロシアを見棄ててアメリカを訪ねようと旅行に出掛けた。彼がライデンへ来たのは、九七年八月三日といわれているが、彼はそこで聡明にして進取的な S. J. Brugmans 教授に出会った。そして乞われて解剖、生理、病理、産科の講義を大学で受け持った。学生を教えるのが優れているのを見た Brugmans は、彼にライデンで身を固めるようにすすめた。一八〇二年、彼はバプテスト派のキリスト教会へ変って Jeanne Madelaine Huygens と結婚した。しかし妻が二七年になくなって、彼は三九年に Angélique Heykoop と再婚してゐる。一八〇四年には市産科医とな

り、また助産婦学校講師にもなって、六三年（八十九歳）までその職を続けた。彼は産科医としてユダヤ人以外にも多くの患者を獲得したが、それは彼の繊細な態度によるものだという。一八一七年頃彼は産科鉗子のやや改変型を考案し、しばしば使われた。ライデン大学産婦人科教室の学生自習室にある多数の鉗子の中から、Beukers教授の案内で実見できた。また彼は骨盤計も報告している。一八二五年、彼は *Dr. P. M.* の後継者としてライデン大学産科教授に任命される場所であったが、結局 *Broers* が選ばれた。一七年には国王 *Wilhelm* 一世によりオランダ人と宣言されたが、これは彼が自分から求めて帰化のための書類を送付しなかつたにもかかわらず、なされたものである。四五年には開業をやめた。四八年八月学位取得五十年の機会に、ケーニヒスベルク大学医学部から、賀状と共に（内科）医学並びに外科学博士としての更改された証書を受領し、後ハーレムのオランダ学術協会から五十年会員ということで銀メダルを授与された。一八六五年八月七日にライデンで九十一歳で死去した。彼の墓所を知るためライデン市公文書館へ行き調査して貰った

が、当時の書類は未整理で、多数ある中から探し出さねばならないとして断られた。百年以上も経った墓所は改葬されるのが多い（*Boot* 教授）ので、存在しないかもしれない。

公文書館で得た『ライデン及び近郊の歴史・考古学年報、一九七八年』掲載の *A. M. Luyendijk-Elshout* 教授のサロモンについての論文には、彼の肖像がある。彼は一九世紀の初め、かつらとシャツ胸部のひだ飾りをやめて、黒いフロックコートと黒いタイをつけた硬いカラーにかえて。五十年間それを変えなかつた。患者の病と死のためであった。

（賛育会病院）